

よ

よろ 情知らぬは匹夫のよ

う(烏帽子折)

「ゆら(勇)の髯。謡曲八島にも「誓者は悲はず、勇者は懼れず」とあつて「勇者」を「よろしみ」と音讀してある。

よろぎたいはい 忠衡の北の方忍の前は二人の子を教へ育てて、夫にも仕ふる道の浅からず、よろぎたいはい心ばせ十八並を打超して源義經

「容儀帯佩」容儀は容貌の體儀にかなふをいふ。「帯佩」は衣服などの着こなしとなしをいふ。「帯は身にとりつけること、佩は腰に帯びること。源氏物語、御法の巻に、「綱年のほどよろぎたいはい」

よろござりま おつつけお下りなされませ、よろござりまもこそそに、跡は福をこつとりと(天細鳥)「よろござりましたの略」

よろにん 用人衆まで何うて其上は縁次第(鑑權三)

「用人有用の義より出た名。もとは才藝あつて役に立つ人を指せる稱呼であつたのが、後には家老職の次に位する重職となつた。されどももと才選の職なるが故に、世家譜筋の筋目見き音も音讀されたのであるといふ。

よかう 門出よかよか、よか便聞かう

ばい(博多) 上方衆は氣がよかけ

よろ——よしをかぞめ

ん、こがいな事はあるまい(博多)「こが」宜といふことを現今も九州地方一般に「よか」といふ。またこれには「よか」を添へ加へて「よかばち」(「ばち」を見よ)「よかけん」などといふ。「よか」を「よ」を「よかけん」といふ。越谷秀真編「物類釋呼」卷五、音韻部に、「ヨイ」といふことを筑紫にて「ヨカ」といふ。

よくかい 欲界の六欲天(天神記)よくかいの四王・切利天、夫婦枕の夜摩天の契け抱合ふと聞(五人兄弟)

「欲界三界(欲界色界)の一。財色・名・色・睡眠等の諸欲の満足を求める念強き有情の住める物質的世界である。欲界には四王天、切利天、夜摩天、兜率天、化樂天、他化天の六天がある。故に六欲天といふ。

よくわか よくわかに御萬歳や、年立ちかへる足駄にて(分巻)萬歳眼の「徳若」を「徳若」にもちつたのである。なほこの文は萬歳眼のもぢりである。萬歳眼はまんざいの條を見よ。

よござ 八右衛門横座を占めて我が評判(葵葉飛脚)

「横座」上座。江次第第二十に「新任大臣大饗座者著、横座」。俳言集覽に「横座は正面の事也、今田舎にてイロリの正面を横座と云ふ(宇治拾遺物語)むねとあると見ゆる鬼ヨコ座に居たり。横座は上座なり」

よご 鎌倉の町屋敷に住み諸浪人の詮議せさせん(蛙合歌)

「横目」横顔から可否を察する義。目附ともいふ。政務の善悪を視、土人の舉動を監視し、非常を按察し事狀を具へて君長に密告する職掌である。この職の設けられたのは足利初政の頃所司代に懸に置かれたのがはじめであらう。大横目、細横目、歩横目、中間横目、小人横目、忍目、附ともある。

よこをりふす 愚痴な子に絆されて忠義を忘るる我こそ愚痴よと思切り、横をりふせる松が根に取つて引据ゑ(霧隠)胸を二つに押隔て横をりふせる甲斐がねの、弱身を見せじと包めども(川中島)

「よこをりふす」といふことである。横ははり臥すの意。古今集・大歌御歌の部、かひうた、「かひがねをさきにも見しがけられなく、よこをりふせるさきの中山」とあるを、釋契沖撰、餘材抄に、「よこをりふせる」としてある。

よざとい 心たまざりや夜ざとくなつて(博多)夜ざとに寐よとして出でければ(今宮)夜徹の義。夜眠れる時に少しの物音にも直ぐ目覺めるをいふ。「夜ざと」の「ざ」とは形容詞「ざ」といふ語根で轉成名詞。

よざにかかり 今宵は夜寒、我等もよざにかかりたし、まづ提重下されよと手なかくれば(猿柳)和訓栞に「よざにかかる。俗語なり、餘座に擊るの義、律語より出たる詞なるべし」と見えてゐる。末座に列す。仲間に入る。相伴に預るの意にいふ。

よしはらすずめ よしはら雀の鳴くやうに息のありたけしやべつて(丹波與作) 待て待てと鳴くよしはら雀、よししみよしの言の葉に化され渡る狐川(淀鏡)

「善原雀」切または「行行子」とも云ひ、夏の望原原の中に居て唯しく鳴く小鳥である。

よしみつ 將軍様の御重代、天國小鍛冶、義光、其外名に負ふ銘の物(善女)

「義光」義光作の刀。義光は元享師前長船の刀匠である。

よしみつ 春日の作の兒文珠閣浮提金の御姿、晝はよしみつ、負ふとどろしよとそれは構はぬ(心三河白蓮)

「善光」物部尾張の子守屋が佛像を難波の堀江に投じた。推古天皇の四年これを法興寺にて安置す。十年四月信濃の人若麻績東入善光これを買つて、信濃國伊奈郡麻績里に移し草堂に安置した。今の座光寺これである。この文は、善光が佛像を賣つた故事によつて、「善光」といふことになりつたのである。「善光寺」はこの木田善光の開基。

よじやう 豫讓が義にも劣るまじ(扇八景)

「豫讓」支那周末戰國時代の人、晋智伯に仕ふ。智伯趙襄子に、姓名を變じ刑人となり、七首を挾んで襄子を刺さうとして果さず、身に漆を塗つて鰐となり、炭を呑んで鰐となり橋下に潜伏す。また襄子に獲られ遂に劍に伏して死んだ。

よしをかぞめ 京の古岡紙子染、やぼてり柿か薄柿か(重井簡) 腰から

下を吉岡の裾黒に鱗形、北條の御紋そや(五人兄弟) 紙に染込む吉岡染のよしやよしめ(の吉岡染)

吉岡染じけんばふぞめ(のけんばふ)を見よともいひ、黒茶染である。紙衣を吉岡染にしたものを吉岡紙子染といふ。黒川道胤撰、兼州府志(貞享三年刊)七、土産門下、服器部に、「吉岡染。西洞院四條吉岡氏人、始染黒茶色、故謂吉岡染、倭俗得事如法行之稱憲法、斯染家吉岡祖傳事如此、故世稱三種茶染、此人得御術、是稱吉岡流、而行于今也。鄙事記に、けんばふ色、下地を濃き花色にして、其上を楊梅の皮を煎じ三返染、又藍にて一返染、又は楊梅にて染むるなり。心中重井筒のこの文に就いては「京の吉岡紙子染云云」を見よ。

よせがまち 皆これ戀路の寄せ楯、根太も根強き門柱(歌念佛)「寄楯商家などの入口の閑楯の、晝間は取はづし、夜間に入れて戸を閉ぢるやうにしたもの。

よそひ されば古歌にも奈良ちやかや、この手盛にて二よそひ、爺と囃とが味を御覽せ(大織冠) 今朝も粥を中がさに三よそひ(晋庚申)和訓栞に「よそひ。俗に飯を碗に盛などをへり。粧ひの養成せし」と見えたる。「よそひ」は「よそふ」の轉成名詞である。大織冠のこの文に「よそひ」ならちやかやをも見よ。

よどつ 式日の御禮は御臺所に與奪あり(會稽山) 鎌倉の御臺所、先妣松下禪尼の風を慕ひ自ら執權の與奪ぞと(最明寺懸) 我申納言を今日一日よだつして朝比奈に貸すぞとよ(虎が屠)

「與奪」與は相手に物を與へる義、「奪」は相手から物を奪ふ義。よつて人へ與へる或は奪ふ主君の權力をいふ。孔子家語の註に、「以賢代賢謂之與奪」と見えたる。よつて職權に代ることもいふ。

四つ三貫匁 今の治兵衛が四つ三貫匁の才覺打みしやいでも何處から出る(天綱鳥)

「四つ」は四貫匁をいひ、正徳元年二月改鑄した悪貨銀貨で貫匁を刻してある。貨率は凡百分中、銀二十分、銅八十分である。享保小判一兩に新銀(享保)五十九七分と計して、新銀七百五十匁は判金十四兩三分餘となる。新銀は四貫匁の四倍の價值あるにより、新銀七百五十匁は四貫匁三貫匁に當る。なほ「貨幣につきて」の節を見よ。

よつじろ 蘆毛に雪のよつじろ、白覆輪や金覆輪(雪女)

「四白」馬の四脚が膝より下の毛の白いもの。岡本記に「馬につまじろといふ事なし、四つじろの馬といふべし」

四つの馬 四つの馬に法の水、三界流轉の濁江は何時か汲み盡さん(釋迦)

「鞭の影に驚く馬云云」を見よ。

四つの鳥 見返り見返りて別れ別れに行く空の、空に音を鳴く四つの鳥、別れば同じ喩にも引かばこれをや申すべし(西玉母)

よつのをりから 「第一第二の絃云云」を見よ。

よつはう 主人の銀四つ寶三貫目あまり引負ひ(女殺)

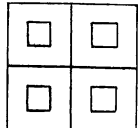
四つ寶即ち四貫匁をいふ。「四つ三貫匁」を見よ。

四つ目殺 先手が味方へ廻りくる四つ目殺に中手を入れて(國性爺) 國性上の詞。敵の一基石を四個の基石で圍んで殺すこと。

よつめゆひ 佐木の紋は四つ目結(五人兄弟)

よつもん 馴れし 金の夜すがらも四つ門の跡夢もなし(冥途飛脚)

「四門」夜の四つ時(亥の上刻、今の午後十時頃遊廓内を打廻る。限の太鼓を合圖に廓の大門を閉鎖し、大門の鐘は町年寄に保管されたのである。往時大坂新町遊廓は夜の四つ時を門限として、内外の交通を遮断した。門限の時刻となれば、太鼓を打つて鐘響町より順次に廓内の諸町に列報して大門を鎖す。廓内に泊らぬ遊廓はこの限の太鼓で廓を出て歸るのである。役者口三味線に「太夫が今夜のもてなし前後に覚えぬ最中、四つ門うつつて觸れば名残惜しきは云云。また羅陽落釋集に、「廓の大門を締切事。寛永の末迄は亥の上刻を以て限の太鼓打たりしに、夜まじ日まじに繁業に付自然と深更に移り、何となく亥の下刻字の上刻と延引せり」とあるやうに門限の時刻も次第に弛んだのである。冥途飛脚のこの文は、松の落葉(元祿十七年刊)巻二、中興當流所作、船荷塚四つ門「翠帳紅羅に枕並ぶ床の内、馴れし寐巻の夜すがらも四つ門の跡夢もなし云云」とある頃に據つたものであつて、正徳限の限の太鼓はその實四つ時ではなくて、子の刻に及んだものであつた。「まんばんだい」をも見よ。



よどつこひ 跳上りたる淀鯉の瀧の壺より湧出る(淀鯉) 竿振上ぐれば淀鯉の口よりみどり子這出て(西玉母)

「淀鯉」兼州府志(貞享三年刊)六に、「鯉魚。所所有之、其中淀橋下所産爲勝、是稱淀鯉」

よとみたかかはこいはか(聖徳太子) よとみたかかはこいはか(聖徳太子) 下から上に讀んで「可愛子母か形見」となる。

よなべ 里の夜なべも時過ぎ(萬年草)

夜釣の鏡であらう。夜波の意にいふ。小野高尚撰・夏山雜談に、「よなべと云ふことは夜釣なり、詩國風云、晝爾于鏡、宵爾桑納云云、詩の意もあながち桑ばかりに限らず。黒川道祐撰、日次紀事、九月十三日の條に、「夜鏡。凡百工短夜早起、此月夜漸長、故人夜亦作三其事、是謂夜鏡、言及深更則以鏡裏食物食之、故曰夜鏡」。

世並のわるい痘瘡 あつたら肝を潰したと、溜息はづとついたるは、世並のわるい痘瘡に二番湯かけし如くなり(傳多)

和漢三才圖會卷十、人倫之用の部、痘瘡の條に、「大概有日數定結亦一異也、凡出痘始終十二日」とありて、「熱蒸三日、出痘三日、痂癢三日、實膿三日、知くならぬまで、悪くなるを世並のわるい痘瘡といふ。痘瘡を收瘡しめる爲に湯をかけ、一度で效果なく二度かけると二番湯かけるといふ。諸儀定帳(部)研究家所載寫本に、「文久二戊午六月麻疹病人看病人兼向御廣敷人問へ御左之通一、麻疹病人者三番湯掛り二候ハ御尊等可相

勤候 右の通り御座所遠慮可仕候 一、麻修  
看病人并發症治候御醫師之儀千御目通トモ  
御出候儀不及遠慮候 右之通遠慮候事 六月  
御定日數十六日 十二一番湯 十四日二番  
湯 十六日三番湯と見えてゐる。痘瘡の二  
番湯掛りのことも推知される。博多小女郎波  
枕のこの文は、醜い髪面に喩へていうたので  
ある。

**\*よね** 今宵はよれ衆の總揚げ見事  
な事か(女腹切) 若い衆がよれよれ  
といふ程にどうしたかと思つたが、田地を賣つて買ふ故にそれ  
でお山をよれといふ、今譯釋が聞  
えたとき堅い軽口言つて歸れば  
(繪草紙) 隣のよれや朋輩のちよつ  
と来ては、なう初様何も聞かんせ  
ぬか(曾根崎) 他國から上つてこの  
大阪で、よれづかなも握る者が通  
例の男と思ふか(繪草紙)

「おやま」といふに同じ。色茶屋の勤め女をい  
ふ。遊女、井原西鶴撰、俗つれづれ巻之二に  
地獄の釜へさか落しの條に「酒一商は善薩  
七十粒より出づるを流して、飲んで不善の業  
を作る」とありて米のことを善薩といひ、ま  
た江島其撰、傾城禁煙氣巻之二に「女郎は  
下品下劣の扇蓋薩まで筆のあゆみのあしきは  
なし」とありて女郎のことを善薩といつてゐ  
る。蓋し遊女の顔容が善薩の如く美しいとい  
ふ意よりして、遊女を善薩と異稱し、また米  
を善薩と異稱するより、遊女をよれ(米)とも  
いふたのである(異説に「ね」は夜寝の義だ  
といひ、またよきね即ち好き女の義だといふ  
はいがが)。  
「よねづかににぎる」とは、遊女を買つて樂し  
む、即ち傾城の猛者をなほいひ「傾城袖を  
握るともらふ。」つかににぎるを見よ。

**よねまんぢゆう** あたか餓頭よ  
れ餓頭、そりや淺草にあるげ  
な(吉岡染)  
〔米餓頭〕普通の餓頭の皮は小麦製なるに、米  
餓頭は其皮を米で製したもので、江戸淺草金  
龍山の餓の名物である。而醜稱、好色五人女  
に「淺草の米まんぢゆう」。江戸鹿子(貞享四  
年刊)に「米餓頭屋、淺草金龍山ふもとや同  
所鶴屋」。遊遊笑談飲食の條に「米餓頭は小  
麥の餓頭に分つ名なり、米とちよふより其形  
を米粒の形に作りしなるべし、江戸鹿子に  
淺草金龍山ふもと屋敷とあり、裝一本に  
根本は籠の鶴屋うみぬらん米餓頭は玉子なり  
けりといへるをみれば、もとは鶴卵の形にし  
たるか、但しもより今の形なるを狂歌は鶴  
子にとりなしたる歟、江戸土産ばなし、雲の  
山の麓のよねまんぢゆうは江戸に隠れなき名物  
なり、一とせの小歌に、金龍山で同道しよ、  
戻りがひもじか米餓頭と唄へり。

**\*よねん** 子の日の松や根引のよね  
ん(雪女)  
「よね」その條に撥音んし増加した語で、  
「びくに」比丘尼をびくにん(念見)とら  
ふ類である。遊女。  
**\*よはひぼし** 見送る軒と見返る野  
邊と、中に飛びかふ夜這星(繪草紙)  
夜松が生えまゝならば夜這星でも  
飛ぶまいか(萬年草)  
〔夜這星〕流星。多く夜這ひの意にかけてゐ  
ふ。夫木集に「うらやまし誰をみそらのよは  
ひ星……」。頭書増補用集大全(元祿元年  
刊)に「流星」。

**よひねまどひ** 宵寐まどひの小市  
郎、竹が背中にふらふらと重井筒  
宵寐まどひの後だち、前後も知ら  
ぬ。  
〔宵寐〕よひまどひに同じ。宵からぬむた  
くなること。  
**\*よへ** 道具屋おかめ、與兵衛とは  
思へば近き町つづき(水明日)  
〔與兵衛〕異株子作、ひぢりめん卯月紅蓮〕及  
び「卯月調色に見え人物である。假作人名  
部を見よ」。  
**\*よまひごと** どこそで病も出ませ  
うと、よまひ言して入りけれ  
ば(冥途飛脚)  
世迷ひ言の義。愚痴。不平をかこつこと。獨  
り口説。和訓栞に「よまひごと」御口説する  
をいふゆゑ、自詠の意なり」。  
**よみ** かの親家財負けほけ、よみとか  
上りもしらぬひらよみに、そも三  
枚はいさ知らず取得人ことばけな  
しなり(大織冠)  
〔證〕牌の遊戯に己が得た札の數値を數へる  
こと。兼州府志(貞享三年刊)七、土産門下、  
賀留多の條に「其砂之法、其給三人或五人  
圍坐、其内一人左手取、持賀留多、以其裏面  
上下混雜、不引其畫、配分而置、各各之、然  
是謂切、賀留多、其爲戲謂、賀留多、然後  
人謂得之札數、二三次第、早拂、證所、持  
之札、是爲勝是謂、俵俗每算、之謂證」。  
當世武野俗談に、りつと云ふ女の賀留多の上  
手なるを記せる條に、「されはこのりつと云  
ふ女の身に、幼少より賀留多を好き上手に  
て、所方方へよみ打にあるきけるが……彼  
のなきあがりの安き方へ打込やうに致をもつ  
て、よみ打の上手と申すべし」。「かう」をも  
見よ。

ておはせしが(加増曾我) この身の  
果を讀賣に、誰が節附けて田舎ま  
で、唄ひ流さん(蜆川(卯月紅蓮))  
〔讀賣〕あざうしを見よ。  
**\*よみせ** 夜見世尻りが氣を付け  
て(釜甕)  
また其上に稻荷あたりの  
裏屋小路のをぞき廻り、あげくに  
この頃は夜見世狂も付いたげ  
な分蘗  
〔夜見世〕遊脚では夜になると品位高からぬ遊  
女ども格子内に並居て客を招く、これを夜見  
世といふ。夜見世に行つて遊女をひやかして  
歸る遊脚郎を夜見世行つとも。夜見世に行  
つて遊女にうつつを抜かすを夜見世狂とい  
ふ。野領玄三味線寶水五年刊卷之五に「元  
和年中に此新町にあつたり、承應年中に天滿  
三間屋の色町も同じくこに軒を並べ、延寶  
三つとし彌生中の六日より夜見世といふ事  
はじまりて、狀關の響はれ日月ひかりかがや  
き云々」。

**\*よみち** 與兵衛が命を繼いで下さ  
る御恩徳黄泉の底まで忘れ  
か(安奴)  
〔黄泉〕やみち(閉路の義。冥途をいふ)。十  
玉辭に「閻魔王國名無佛世界亦至種羅國」  
亦名「閻羅國」。黄泉と書くは、左傳「證公  
元年に「誓之曰不及黄泉無相見也」と  
あるに出づ。

**よみ** 和藤内ちつとも應せず、よめ  
たむりよめたりさては異國の虎狩  
な國性益合(戀) 人相骨柄かれて不  
審に思ひしが、今こそよめたり御  
尋の夏仁親王よな(持統天皇歌草)  
懐で錢よむやうにさきてきて俯向

ておはせしが(加増曾我) この身の  
果を讀賣に、誰が節附けて田舎ま  
で、唄ひ流さん(蜆川(卯月紅蓮))  
〔讀賣〕あざうしを見よ。  
**\*よみせ** 夜見世尻りが氣を付け  
て(釜甕)  
また其上に稻荷あたりの  
裏屋小路のをぞき廻り、あげくに  
この頃は夜見世狂も付いたげ  
な分蘗  
〔夜見世〕遊脚では夜になると品位高からぬ遊  
女ども格子内に並居て客を招く、これを夜見  
世といふ。夜見世に行つて遊女をひやかして  
歸る遊脚郎を夜見世行つとも。夜見世に行  
つて遊女にうつつを抜かすを夜見世狂とい  
ふ。野領玄三味線寶水五年刊卷之五に「元  
和年中に此新町にあつたり、承應年中に天滿  
三間屋の色町も同じくこに軒を並べ、延寶  
三つとし彌生中の六日より夜見世といふ事  
はじまりて、狀關の響はれ日月ひかりかがや  
き云々」。

**\*よみち** 與兵衛が命を繼いで下さ  
る御恩徳黄泉の底まで忘れ  
か(安奴)  
〔黄泉〕やみち(閉路の義。冥途をいふ)。十  
玉辭に「閻魔王國名無佛世界亦至種羅國」  
亦名「閻羅國」。黄泉と書くは、左傳「證公  
元年に「誓之曰不及黄泉無相見也」と  
あるに出づ。

**よみ** 和藤内ちつとも應せず、よめ  
たむりよめたりさては異國の虎狩  
な國性益合(戀) 人相骨柄かれて不  
審に思ひしが、今こそよめたり御  
尋の夏仁親王よな(持統天皇歌草)  
懐で錢よむやうにさきてきて俯向

いてばかり(心中天狗息)  
「善むかる。合點す。推知す。歌へる。萬葉集に、「月日を歌みて」と見えたる。「よみ」をみ見。

\*よめ 好い男さへ稀なれば、少しよめなる女房のびかしやかぶるは科ならず(薩摩歌)  
「よめ」は弱女の義、たをやめ。優麗な女。倭訓栞に「よめ。婦をいふ、弱女の義也、手弱女人といへる意也」。

よめのふし 骨あひ肉なみよめの節(源義經)  
「夜服節」馬の前脚の膝關節。都會節用百家道に馬形之名所の圖説を載せ、馬の前脚の膝關節の少し上に夜晒と記してある。倭訓栞に、「よめ。倭名抄に夜服をよめり、馬の前脚に有、或は昔によべり、其形蹄の如し、よて附蹄ともらふ、よめの節は屈の節とらふ是也」。

よもぎのや 産屋の儀式柔の弓、蓬の矢事七夜の御賀(松風)  
「蓬天蓬の葉で羽を短いだ矢をいひ、男子出産の時、これを柔の弓につがへて四方を射、以てその子の將來の雄飛を祝福したものである。蓋し禮記射義に「男子生、桑弧六、蓬矢六、以射天地四方、天地四方者、男子之所有事也」と見え、支那上代の故事にもつづいたのである。太平記卷二十五、醫師評定の條に「六月八日の朝生産容易くして、然も男子にてぞおほしける、蓬矢の慶賀天下に聞えしかば」。

\*よりおや 寄親の勘十郎に打明けて(歌念佛) 中間頭寄親の四十平下見(して) (薩摩歌)  
「寄親」親方。倭訓栞に「よりおや。寄親の義、寄は寄寓の謂、親は親方の如し、事文類聚の

聖主也といへり、よりこも寄子にて、よりおやの對稱也。  
\*よりかぜ 未ば淀のや男山、麓に立てる夫婦塚、その二道により風の、悋氣争ひ理をもちて、霜にふけたる女郎花(松風)  
「頼風」めをづかを見よ。

\*よりにんぎやう これ摩耶夫人調伏のより人形、生れ年御名を書き(龜遊)  
「寄人形」髪を寄らせる人形の義、咒詛しようとする人に似せて作れる人形。  
\*よりぼう よりぼう。杖よ帚よ提灯と、若い者ども駈出る音(生玉)  
「寄棒」挿手などが用ゐる五六尺の圓い棒。

\*よるのおとど 殿上・晝御座・夜の御殿(振袖始)  
「夜御殿」清涼殿内晝御座の北の妻月の内の稱。「朝拜殿」尊あれば云云を見よ。  
よるのとの これ夜の殿、我は微塵もたくまぬこと、皆親爺の無分別より起つた(天鏡)  
「夜殿」夜の狐をいふ。越谷秀實編物類稱呼卷二、動物に「きつね。関西にて晝はきつね、夜はよるのとの」といふ。西國にてはよるのひとぞらふ。又関西にてすべてけつねといふなり。

\*よろこぶ 夕霧殿の假の情連合ひ子を誕生とて、此方へ請取り言はば我がよろこぶ子(夕霧) わらはば後づれ久太郎をよろこび、殿にも後れ兄弟ながら後家親の養育に

て(吉岡染) 何の因果にかよるこびしてもう三年、今宵の乳の漲ること(天鏡冠) 宇與の上臈悦びの氣がついて、うめき苦しみ給ふ聲(藤附)  
「悦」出産の悦の義より轉じて分娩するをいふ。生む。「悦びし」もう三年の悦びは名詞。出産。「悦びの氣」とは産氣をいふ。  
よろこびぐさ 小草の錦色色の、鎧草として小手さし原(千疋犬)

「鎧草」牡丹の異稱。刺あるによつていうた名であらう。非密蔵時記薬草・夏の部に「よろひ草。牡丹の一名なり、名義未詳、夜白神の略言にや」。  
よろひびづき 金物の音に目や覺めん、鎧づきすな足音すな酒呑童子枕言葉)  
「鎧付」絶えず鎧を揺上げて隙の無いやうにすること。平家物語卷九「二のかけの條に「鎧付を帯せよ、裏かかすな鎧を傾けよ」。

よろひどほし 革籠の中より氷のやうなる鎧通おつ取り腹にぐつと突立て(堀山姥)  
「鎧通」太刀脇差の他に別に佩ひる刺刀であつて、敵と組合うた時に鎧の上から刺殺すに用ゐる。  
よろひむし やたけ心のよろひ蟲(小栗判官)  
「甲蟲」脊に堅い甲殻ある蟲の總稱。

よんじりよめご 「だうがねのよんじりよめご」を見よ。

らいぎ 頼朝が世にこの仙鳥の出づる事来儀の鳳凰これならん(扇八景)  
「来儀鳥の来り舞うて容儀あること」。畫經・益我篇に「雷器九成、鳳凰來儀」とありて註に「來儀、像舞而有容儀也」。

らいくわん 私ば雷煥が子孫雷同と申す鍛冶(唐船晒) 雷煥といふ者天文を考へ、土中を鑿つて干將莫邪の二劍を得たり(堀山姥)  
「雷機」晋時代豫章の八、韓蒙に通じ、武帝の時斗牛の間に紫氣あるを判して、豫章督城縣の獄屋の基を掘つて、雷泉・太阿の二寶劍を得た。詳しくは普書及び藥求に出てある。ちやうくわ「ばくや」を見よ。

らいさん 持經禮讚つくろはす(輝九)  
「禮讚」善導大師の撰往生禮讚の略。阿彌陀佛の淨土に往生せうと願ふ者の晝夜六時に禮拜讚歎するに用ゐる讚歌である。  
\*らいじやうどうのゆみ 御供の武士には渡邊の綱調度掛として雷上動の御弓、坂田の公時箆の(役關八)

雷上動の弓或は額政隆の弓といへど定かでない。伊勢貞丈撰の四季草・春上、及び貞丈雜記卷十弓矢の部にこの弓のこと知れぬ由記してある。源平盛衰記十六、三位入道安藝等の條に「二十平したる大中黒の矢の表に、水破兵破と云矢二を指、雷上動と云弓をもたせたり」。